

基礎研究を励まし続ける爽やかな風

カーボンニュートラル、競争力を失った製品・事業からの撤退と新規事業の創出、人手不足の解消、先端技術への対応など、環境変化の激しい時代にあつて企業の課題は山積している。各社とも生き残りに必死で、経営陣も従業員も知恵を絞り、汗をかいている。そのなかで日本の科学技術の発展を願い、有望な研究を対象に助成金事業を長年に

わたって続けている一企業の姿が尊く映る。

ハリマ化成グループが運営する松籟（しょうらい）科学技術振興財団は1983年の設立以来、基本財産の運用益と寄付金を資金に、これまでに823件、総額9億3290万円を助成してきた。ノーベル化学賞受賞者の野依良治博士、鈴木章博士への助成実績もある。当初の助成金は1

件100万円。2年前に諸物価高騰の折、不十分と判断、200万円に増額された。助成金は装置や消耗品の購入、学生の学会派遣などに活用される。研究者が思い切り研究に集中できる環境の大きな支えとなるだろう。

この活動は、ハリマ化成グループの創業者である長谷川末吉氏が松から得られるトール油の事業化に取り組み、軌

道に乗せた実績が評価され、当時の科学技術庁（現文部科学省）から表彰されたのがきっかけだった。栄誉に感じた末吉氏が、日本の科学技術の振興に貢献したいとの思いから財団を設立した。トール油事業の端緒となった加古川製造所にあるトール油蒸留パイロットプラントは今年2月、日本化学会から「化学遺産」の認定を受けている。

ない、ささやかな助成だが、今後も末永く続け、科学技術振興に役立ちたい」と謙遜する。だが、40年あまり経過しても設立趣旨を変わずに受け継ぎ、日本の未来を担う研究者を励まし続ける。論文発表数の減少など日本の基礎研究力の低下が憂慮されている今日において、その活動は輝きを増してみえる。

現在理事長の長谷川吉弘氏（ハリマ化成グループ社長）は「あまり大きなことは出来

ない、ささやかな助成だが、今後も末永く続け、科学技術振興に役立ちたい」と謙遜する。だが、40年あまり経過しても設立趣旨を変わずに受け継ぎ、日本の未来を担う研究者を励まし続ける。論文発表数の減少など日本の基礎研究力の低下が憂慮されている今日において、その活動は輝きを増してみえる。

「松籟」とは松の梢を吹き抜ける風や、その音。世知辛く世界情勢も不透明な昨今、企業が、こんなにも爽やかな風を吹かせる力を秘めていることに、改めて思いを巡らせるのもよいだろう。